

1 バリアフリー対応を図るべき利用者について

対象者		建築的対応の考え方
①高齢者		<ul style="list-style-type: none"> ・加齢による移動の困難，視認性の低下等への対応が求められる ・機器類の操作性への対応が必要である
②身体障害者	肢体不自由者（車いす使用者，杖使用者，上下肢障害者等）	<ul style="list-style-type: none"> ・高低差がバリアとなるので，上下移動や，段差への処理を行う ・ボタン，機器類の操作性，位置等への対応が必要 ・上肢障害者では，設備や器具等の操作の容易性にも配慮する必要がある
	視覚障害者（全盲，弱視）	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚情報を体感，聴覚等の情報として伝達する必要がある ・必要な安全確保，誘導，注意喚起等に対して視覚障害者用ブロックや音声等を適切に配置することによって対応する ・視覚障害者誘導用ブロックの敷設方法，スイッチ，ボタン類等の配置，形状の統一化，標準化が求められる ・ガイドヘルプ等ソフト面での対応が求められるほか，建物の用途，運営方法に応じた建築的対応が必要である
	聴覚障害者（ろう者，難聴者）	<ul style="list-style-type: none"> ・音情報を視覚情報に変える対応（設備）が求められている ・手話通訳等ソフト面での対応が求められる等，建物の用途，運営方法に応じた設備や人的対応が必要である
	内部障害者（腎臓，心臓，呼吸器障害，膀胱等人工臓器装着者）	<ul style="list-style-type: none"> ・腎臓，心臓，呼吸器障害は，階段の昇降等が困難であるため，特に長い移動，上下移動に配慮が必要である ・人工臓器装着者への対応は，特に便所設備での配慮が求められている。本書では，「オストメイト対応」として記載している
③知的障害者		<ul style="list-style-type: none"> ・可能な限り，建築物等の認識や理解を助けるため，動線や配置のわかりやすさとともに，人的サポート等ソフト面での対応が求められる。建物の用途，運営方法に応じた建築的対応が必要である
④精神障害者		<ul style="list-style-type: none"> ・可能な限り，建築物等の認識や理解を助けるため，動線や配置のわかりやすさとともに，人的サポート等ソフト面での対応が求められる場合もある。建物の用途，運営方法に応じた建築的対応が必要である
⑤児童，乳幼児		<ul style="list-style-type: none"> ・安全性の確保が重要である ・低い位置からの視認性，操作性を配慮した設計が求められる ・乳幼児では，保護者同伴の場合が大半であると考えられ，建築的な対応については，保護者への対応も必要となる。便所等では乳幼児を伴っている者が男性，女性両者の場合があることに配慮する必要がある（例：便所のベビーチェア，オムツ交換用シートの設置は，男女両方の便所に設置） ・乳幼児を同伴する際のベビーカー利用に対しても配慮する必要がある
⑥妊婦		<ul style="list-style-type: none"> ・階段の昇降等が困難であるため，特に長い移動，上下移動に配慮が必要である ・足元が見えない，前かがみの姿勢，しゃがみが難しい等の動作困難があることに配慮する必要がある
⑦外国人		<ul style="list-style-type: none"> ・情報伝達上の配慮が必要である ・特にソフト面での対応が求められるため，建物の用途，運営方法に応じた対応が必要である
⑧上記外の市民		<ul style="list-style-type: none"> ・身体の寸法には個性があり，また，誰でもけが，病気等によって一時的に障害が生じる可能性がある。このため，様々な障害に対する配慮をすることが，上記以外の市民にも使いやすい建物となる

2 基本的寸法

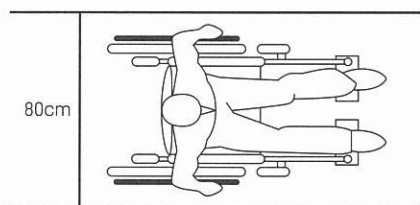
(1) 主要寸法の基本的な考え方

通路、出入口等

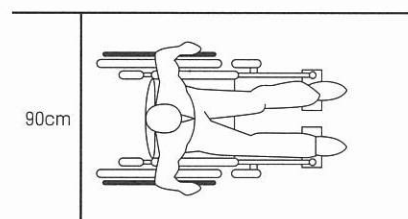
幅員の基本寸法	80cm：車いすが通過できる寸法
	90cm：車いすで通過しやすい寸法 通路を車いすで通行できる寸法
	120cm：通路を車いすが通行しやすい寸法 人が横向きになれば車いすと擦れ違える寸法 松葉杖利用者が円滑に通行できる寸法
	140cm：車いすが転回（180度方向転換）できる寸法
	150cm：車いすが回転できる寸法 人と車いすが擦れ違える寸法 松葉杖利用者が円滑に上下できる階段幅の寸法
	180cm：車いすが回転しやすい寸法 車いす同士が行き違いやすい寸法
スロープのこう配	8分の1：建築基準法上の規定，ハートビル法の利用円滑化基準（高低差16cm以下の場合）
	12分の1：国際シンボルマークの掲示基準，ハートビル法の利用円滑化基準
	15分の1：ハートビル法の利用円滑化誘導基準（敷地内通路）

通行に必要な幅

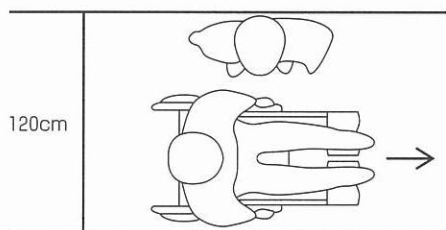
① 車いすで通過できる寸法



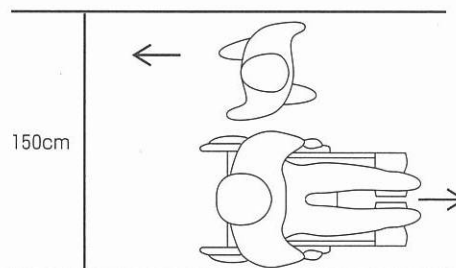
② 車いすで通過しやすい寸法 通路を車いすで通行できる寸法



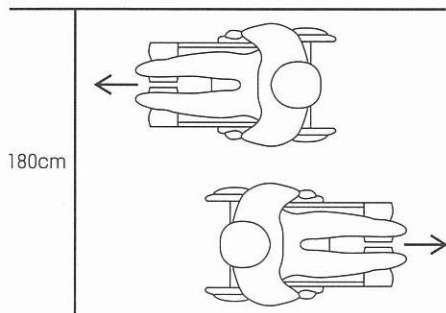
③ 通路を車いすが通行しやすい寸法 人が横向きになれば車いすと擦れ違える寸法



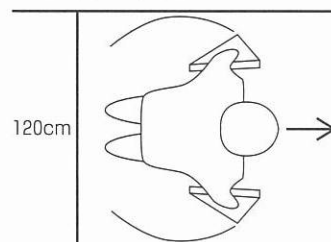
④ 人と車いすが擦れ違える寸法



⑤ 車いす同士が行き違いやすい寸法



⑥ 松葉杖利用者が円滑に通過できる寸法



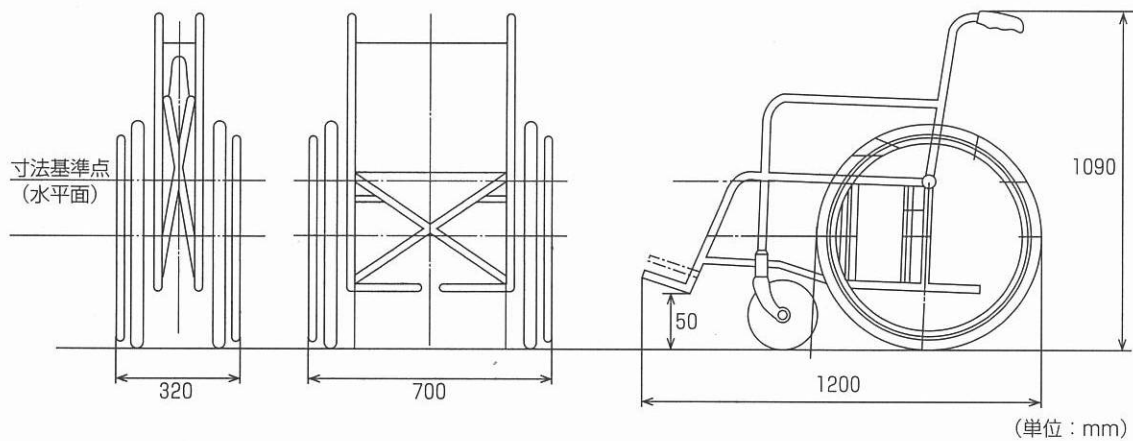
(2) 車いすの寸法

① 手動車いすの寸法 JIS T 9201

車いすの形状・寸法はJIS規格（日本工業規格）により定められている。その分類は主としてその外観及び用途によって、自走用と介助用に分けられる。自走用には、標準型、座位変換型、スポーツ形、特殊型があり、介助用には標準型、座位変換型、浴用型、特殊型がある。

車いすの全幅は700mm以下としているが、日本国内の建築関係の現状を考慮し、当分の間650mm以下が推奨されている。また、JISでは、車いすの座面の高さについては規定がないが、介助用車いすでは、自力移動を助けるために座面の高さが低くなっているものがあるため、設計の際には配慮を要する。

自走用標準型の例



JIS規格による車いすの寸法は、以下の通りとなっている。

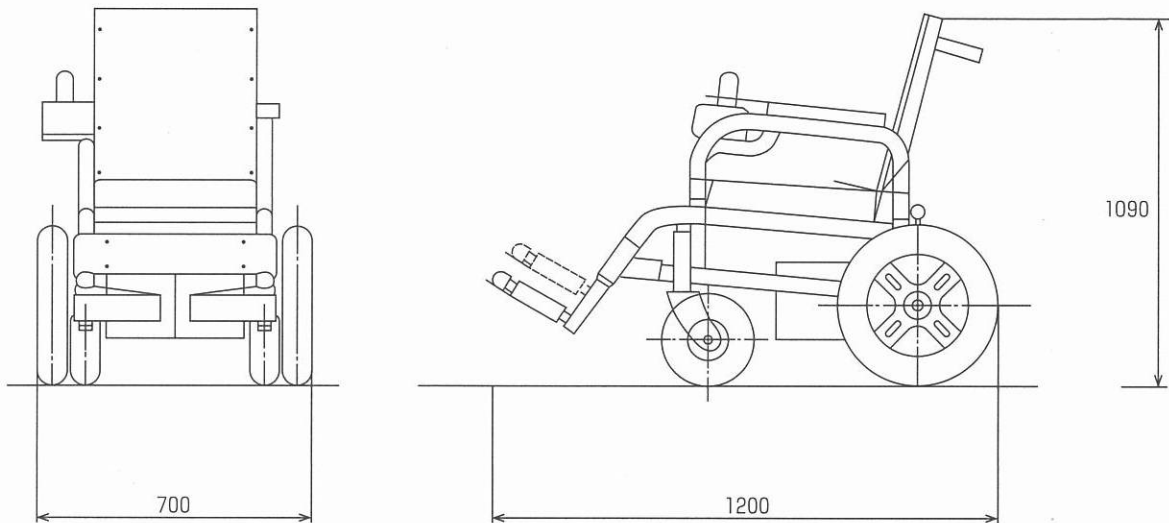
手動車いすの寸法 (単位：mm)

部位	寸法値
全長	1200以下
全幅	700以下
レッグサポート（フットレスト）高	50以上
折り畳み幅	320以下
全高	1090以下

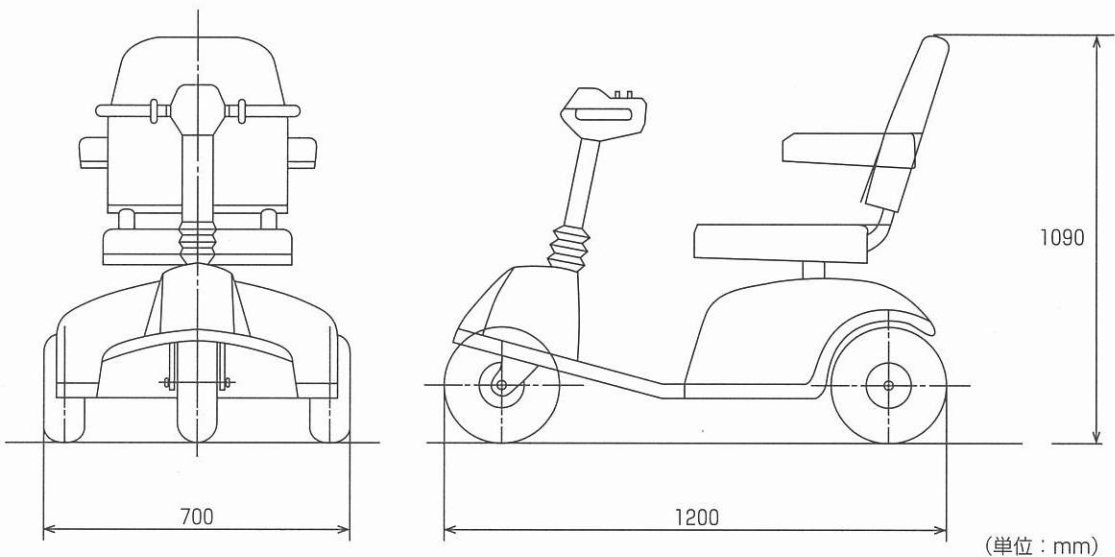
② 電動車いす JIS T 9203

電動車いすの寸法はJIS規格により定められている。形式は自操用と介助用に分けられ、自操用は標準形、ハンドル形、座位変換形、簡易形、特殊形があり、介助用は標準形、簡易形、特殊形がある。

自操用標準形



自操用ハンドル形



電動車いすの寸法

(単位：mm)

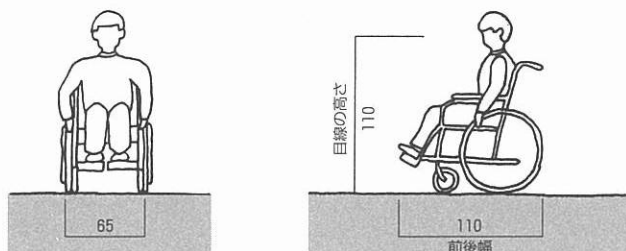
区分	最大値
全長	1200
全幅	700
全高	1090

リクライニング機構及びリフト機構を装備する電動車いすは除く

(3) 車いす使用者の人間工学的寸法

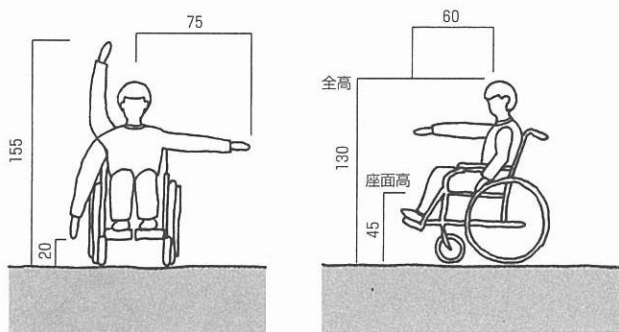
① 目線の高さ

(単位：cm)



② 手の届く範囲

(単位：cm)

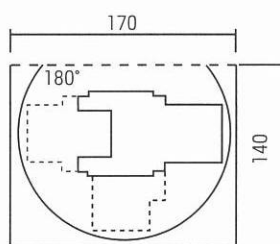


(4) 車いす使用者の基本動作寸法

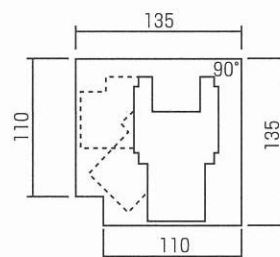
① 手動車いすの最小動作空間

(単位：cm)

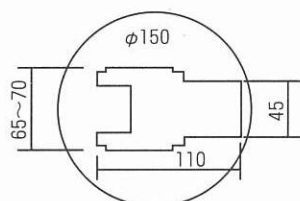
180° 回転 (車輪中央を中心)



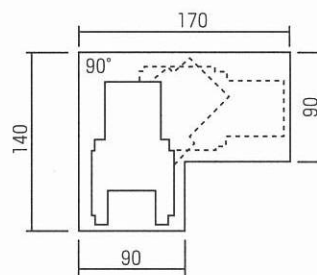
90° 回転 (車軸中央を中心)



最小の回転円



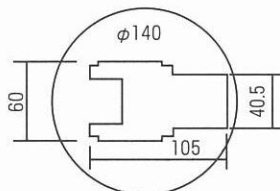
直角路の通過



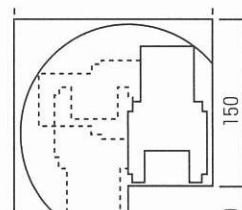
② 電動車いすの最小動作空間

(単位：cm)

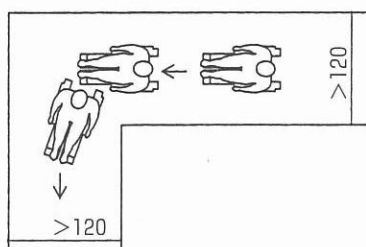
360° 回転 (車輪中央を中心)



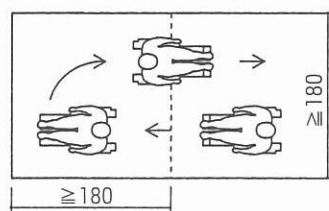
180° 回転 (車軸中央を中心)



直角路の通過 (屋外用)



方向転換

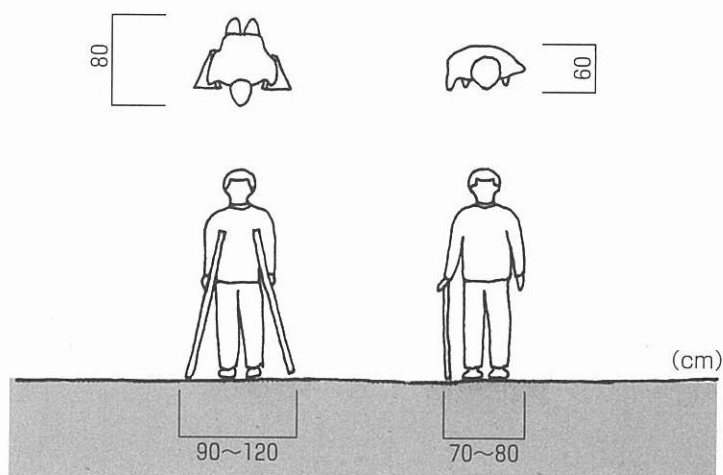


(5) 杖利用者の基本動作寸法

① 人間工学的寸法

- ・ 松葉杖利用者の歩行時の幅は、90cmから120cm程度
- ・ 杖を片手で使用した際の歩行時の幅は、70cmから90cm程度
- ・ 低いところに手が届かない（しゃがむことが出来ない）

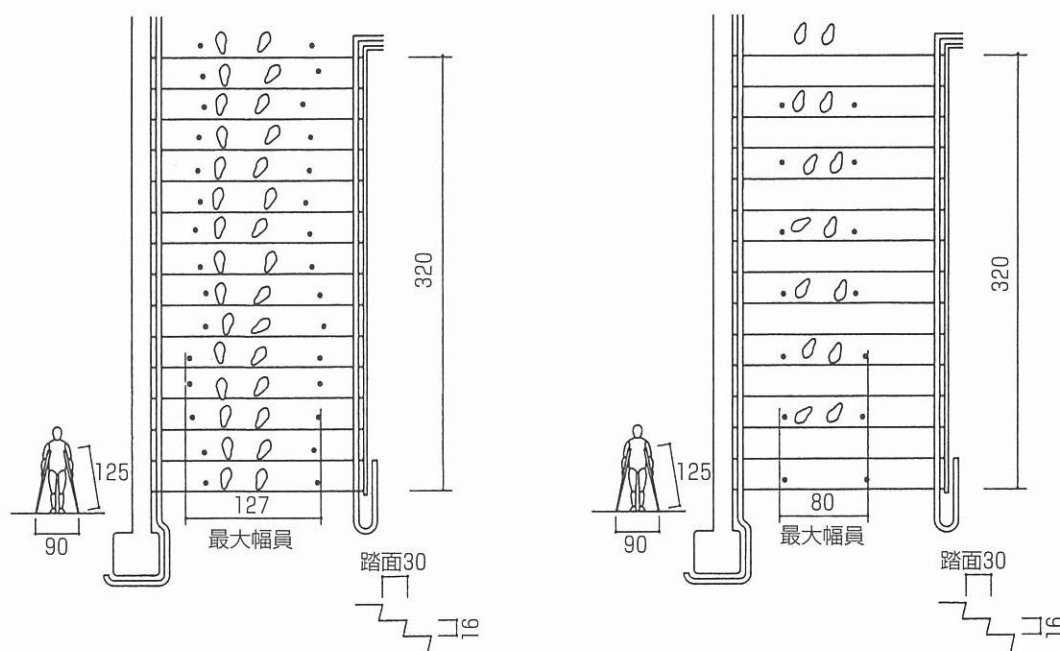
(単位：cm)



② 杖利用者に必要な動作空間

二本杖使用者の階段の昇降

(単位：cm)



二本杖の軌跡（昇り）

二本杖の軌跡（降り）